

東日本大震災被災地における看護学生の継続的 ボランティア活動の意義と活動の再実現性

尾無 徹¹⁾, 井上都之¹⁾

Significance and Re-Realization of Continuous Volunteer Activities by Nursing Students in Areas Affected by the Great East Japan Earthquake

Toru Onashi¹⁾, Satoshi Inoue¹⁾

要 旨

東日本大震災被災地である岩手県山田町において、2011年11月から約10年間、岩手県立大学看護学部学生ボランティア団体が、仮設住宅でのサロン活動や高校生対象のキャリア教育等の被災者支援を行なった。本活動のまとめと、学生の学びや学生自身が認識した活動の成果から、ボランティア活動の意義と再実現性について明らかにすることを目的に実施した。

本活動の内容を整理すると同時に、活動報告書及び、自主製作した書籍の原稿17名分から、学生が活動を通じて学んだこと、感じたこと、考えたことが記述されている部分を抽出し、質的内容的に分析した。

看護学生は災害ボランティアを継続することで【被災者から住民への認識の転換】をし、【学生だからこそできる被災者との関係性】を構築することで【被災者の仮設住宅生活の支え】となっていたこと等、学生の学びと学生自身が認識する成果が明らかとなった。本活動を再実現するためには、①活動予算の獲得②学生の学びの促し③被災地と学生のニーズの調整が重要な要素であると考えられた。

キーワード：東日本大震災、看護学生、継続的ボランティア活動

はじめに

岩手県山田町は、2011年3月11日に起きた東日本大震災の津波と火災により甚大な被害を受けた。死亡者683人、行方不明者142人、被災家屋割合は町全体で46.7%、海沿いの地区では70%を超えた(山田町, 2018)。さらに、東日本大震災前に19,270人(2011年3月1日現在)だった人口は、10年が経過し14,895人(2021年8月1日現在)と4,000人以上が減少している(山田町, 2021)。東日本大震災は被害の範囲が広いため、復興事業に遅れが生じ、仮設住宅での生活は過去の災害と比較して長期にわたっている。このように、被災で町が一変しただけ

はなく、人口減少の加速や住宅再建の遅れによる過度のストレス等、中長期的な視点から見ても課題が多い災害である。

この東日本大震災発災後の2011年11月から山田町において岩手県立大学看護学部ボランティア団体「カッキー'S」が約10年間活動してきた。岩手県は県土が広く、岩手県立大学の所在地である滝沢市から山田町までは片道141km、車で約2時間半かかる。2020年度は新型コロナウイルスの影響により現地での活動ができなかったものの、この長い道のりを約10年間毎月通い、100回を超える活動を行ってきた。看護学生が災害時のボランティア活動をす

ることで、富澤他(2016)は看護学教育における効果が得られること、祝原・渡邊(2019)は学業への意欲が高まること、中島・大渡・奥村(2013)は問題解決思考が養われることについて明らかにしている。しかし、本活動のように、それぞれの学生が約2年半ほほ毎月活動したことでの学びや、学年間で引き継ぎを行い、長期的に活動を発展させながら継続した活動の実績についての報告はほとんど見当たらない。今後大規模災害が頻発することが予測されており、被災地において長期的に支援ができる団体が必要となる。そのため本報告では、10年間の活動の内容と実績を整理するとともに、学生が活動で得た学びと学生自身が認識した活動の成果をまとめ、本活動の意義と再実現性について考察した。

目的

10年間の活動の内容と実績を整理するとともに、学生が活動で得た学びと学生自身が認識した活動の成果をまとめ、本活動の意義と再実現性について考察することを目的に実施した。

方法

1 用語の定義

再実現性
活動内容が同様の場合、本活動と同一の意義が得られることと定義した。

2 検討方法

活動概要と学生の学びと学生が認識した活動の成果について下記の通りまとめ、この内容から本活動の意義と再実現性について検討した。

1) 活動概要について

カッキー'Sの活動記録及びこれまでに本活動について執筆された雑誌や報告書から、活動概要、活動の実際等についてまとめるとともに、学生・大学・教員・被災地保健師の役割に分けて整理した。

2) 学生の学びと学生が認識した活動の成果の内容分析について

(1) 対象

これまでに本活動について執筆された報告書の原稿2名分と、カッキー'Sが発刊準備中の書籍の原稿15名分の計17名分を分析対象とした。

(2) データ収集法

既に作成された本活動の報告書とカッキー'Sが発刊準備中の書籍の原稿について、本人の同意を得て収集した。原稿は、本活動の実施内容とそこで学んだこと、感じたこと、考えたこと等を自由にA4用紙1枚から2枚程度で依頼されたものであった。

(3) データ分析法

本活動の学びと成果が何かを探索するため、質的内容的に分析した。上記の通り収集したデータの内容や表現が損なわれないようコード化した。次に、コードの意味内容の共通性を解釈し、複数のコードが集まったものに名前をつけ抽象度を上げてサブカテゴリーを抽出した。そして、サブカテゴリーの類似性や相違性に注目し、カテゴリーを作成した。信頼性、妥当性を担保するため、この過程において研究者間で確認をしながら実施した。

3 倫理的配慮

本研究は、2021年7月の岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:320)。報告書及び書籍の原稿の執筆者に、研究の目的や研究協力の自由、プライバシー保護等の倫理的配慮等について記した文書を送付し、同意書に署名を得た上で実施した。

結果

1 活動概要

1) ボランティア団体の発足

2011年10月15日に被災地保健師が、仮設住宅に住む被災者への支援の必要性を岩手県立大学看護学部の教員と学生へ伝えたことを契機に、学生有志8名がボランティア団体を発足させた(岩手県立大学看護学部, 2012)。被災者同士の交流を促進し、コミュニティをつくることを目的として、同年12月より月1回サロン活動を開始した。また、被災者と関わる中で、学生が「少なくとも住宅再建までの心身のサポートが必要」と考え(岩手県立大学看護学部, 2014)、これを目的に長期的な活動へと発展した。

2) 活動実績

カッキー'Sの主軸となるサロン活動の他、家庭訪問やキャリア教育等、全6種の活動を展開した。2011年11月から2021年3月までに

4) 活動の実際 (図2)

(1) サロン活動と家庭訪問活動

当初は仮設住宅2カ所から活動を開始したが、参加人数の拡大と被災地のニーズに伴い、活動範囲を広げ、最終的に全8箇所合計335回サロンを開催した。サロン活動の内容は、季節のイベントを中心に、血圧測定や健康教育、学生が考案した健康体操等を行った。さらに、外部支援団体より支援を受けてアロママッサージについて学修し、ストレス緩和を目的にほぼ毎回実施した。

また、2014年8月よりサロン活動と並行して、保健センター周辺の家庭訪問をし、血圧を測定しながら傾聴活動を行なった。

(2) キャリア教育

医療職を目指す高校生の増加に伴い、将来地元で根付くことを目的にキャリア教育を実施した(深澤, 2013)。2012年度から2018年度に年1回、合計7回開催し、参加人数は合計185名だった。内容はカッキー'Sの活動発表や看護師や保健師等の仕事内容とやりがい、資格の取得方法等の教授で

ある。

(3) 地域診断と環境要因への働きかけ

サロン活動に男性の参加者が少なかったため、地域診断を実施した。その結果、男性が一般住宅や仮設住宅双方において体力の衰えを感じている者が6割を超えているにもかかわらず、女性と比較して運動に気をつけているものの割合が低いことが分かった(伊藤, 2014)。そのため、環境要因への働きかけとして、募金活動とクラウドファンディングにより資金を集め、2015年5月に山田町保健センターへ運動器具の寄贈した(岩手県立大学, 2013)。運動器具を寄贈する前は年間延べ約1,500人だった保健センタートレーニングルームの利用者数は2015年度には4倍以上の延べ6,554人まで増加した(山田町, 2015)。

(4) 活動の発信

本活動を題材に卒業研究を行った学生は5名だった。第72回日本公衆衛生学会総会、日本災害看護学会第16回年次大会、世界災害看護学会でカッキー'Sの活動について発表をした。また、2つの雑誌へも投稿を行っ

| | | 2011年度 | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 2015年度 | 2016年度 | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 | 2021年度 | 活動回数 | 山田町へ行った回数 | |
|--------------|-------------------------|----------------------|---------------------------|--|---|-------------------|-------------------|-------------------|------------------------|--------------------------|----------|--------|------|-----------|-----|
| 山田町住宅再建に係る事項 | | | 8月仮設住宅建設完了 (平成23年3月着工) | | ・宅地造成開始 ・災害公営住宅建設開始 | | | | ・宅地造成完了 ・災害公営住宅建設完了 | | 仮設住宅使用期限 | | | | |
| サロン活動 | 集会所① 仮設住宅1カ所対象(戸数67) | 11月視察・12月開始 (月1回) | → | | | | | | | 4月終了 | | | 90回 | 119回 | |
| | 集会所② 仮設住宅1カ所対象(戸数62) | 11月視察・12月開始 (月1回) | → | | | | | | | 6月終了 | | | 68回 | | |
| | 集会所③ 仮設住宅3カ所対象(戸数71) | | 4月開始 (月1回) | → | | | | | | 4月終了 山田町まちなか交流センターへ移行 | | | 84回 | | |
| | 集会所④ 仮設住宅1カ所対象(戸数20) | | | | | | | 4月開始 | → | 9月終了 | | | 18回 | | |
| | 小規模多機能センター | | 4月開始 (月1回) | → | | | | | | 8月終了 | 年1回訪問開始 | → | 休止 | | 67回 |
| | 山田町まちなか交流センター | | | | | | | | | | 5月開始 | → | 休止 | | 8回 |
| 家庭訪問活動 | 保健センター周辺家庭訪問 | | | | 8月開始 | → | | | | | 休止 | | 80回 | | |
| キャリア教育 | 医療職を目指すものの集い | | 年1回開催 (参加者52名) | 年1回開催 (参加者43名) | 年1回開催 (参加者27名) | 年1回開催 (参加者24名) | 年1回開催 (参加者19名) | 年1回開催 (参加者12名) | 年1回開催 (参加者8名) 終了 | | | | 7回 | | |
| 環境要因への働きかけ | 運動器具の寄付 | | | | 募金活動開始 | → | 5月寄付 | | | | | | | | |
| 地域診断 | 地域診断 | | | 年1回実施 | → | | | | 休止 | 休止 | 年2回実施 | | 5回 | | |
| 活動のまとめと発信 | 卒業研究、学会発表、雑誌投稿等 | | | 卒業研究1名 ・第72回日本公衆衛生学会発表 ・月刊地域保健(雑誌)投稿 | 卒業研究1名 ・第16回日本災害看護学会発表及びワークショップ開催 ・卒業研究1名 ・公衆衛生情報(雑誌)投稿 ・世界災害看護学会発表 | 卒業研究1名 | | | 卒業研究1名 | | | 記念誌作成 | | | |

図2 カッキー'Sの活動のあゆみ

についてデータを示しながら結果を述べる。

1) 対象

これまでに本活動について執筆された報告書の原稿2名分と、カッキー’Sが発刊準備中の書籍の原稿15名分の計17名分を分析対象とした。原稿の執筆者の内10名は本活動のリーダーを務めた経験があった。また、17名全員が1年生から3年前期までの2年半活動を継続していた。

2) 学生が活動で得た学び (表1)

(1) 【被災者から住民への認識の転換】

2コード, 1サブカテゴリーで構成された。学生は「住民にはもともと力があるということに気づかされた」と語り、《被災者

から住民への認識の転換》をしていた。

(2) 【実践の中で育まれる主体性】

12コード, 2サブカテゴリーで構成された。学生は「カッキー’Sの活動をよくしたいという思いから衝突しながらも意見を交わした」等《メンバー間での活発な意見交換》を行っていた。また、「自分たちが主体的に活動することの自由さと責任を感じたが、それが楽しかった」といった《主体的に活動するからこそその楽しさ》も感じていた。

(3) 【互いに楽しめる活動を継続する重要性】

14コード, 2サブカテゴリーで構成された。「継続することで、信頼、絆とつながってゆくものだと感じさせられている」といっ

表2 学生が認識した活動の成果

| カテゴリー | サブカテゴリー | 主要なコード |
|---------------|-------------------|---|
| 実践を通じた看護職の成長 | 被災地支援を形にした看護観 | ・カッキー’Sの経験は、看護師として「患者さんにとっての第一優先として考える基礎と |
| | | ・カッキー’Sの経験から学んだ「する方もさしづけてベスになっていく」というのは看護師として |
| | | ・生きることに合う機会が私のケアのベースとなっている |
| | 実践の中から看護の知識や技術の習得 | ・先輩とのつながりができコミュニケーションや看護の知識が身についた |
| | | ・対象者へ伝える健康教育を熟慮した経験が保健師になってから活かされている |
| | | ・被災地の自立に向けて、「手を出さないことを身についた |
| 被災地及び被災者との絆 | 卒業後も被災地への貢献という思い | ・卒業後もカッキー’Sの卒業生と災害に関わる地域貢献をしていきたい |
| | | ・被災地から10年が経過したが、これからも被災地に寄り添っていききたい |
| | 被災地や岩手県への愛着 | ・カッキー’Sの活動をきっかけに山田町や岩手県をより好きになることができた |
| | | ・カッキー’Sの活動を通して岩手が好きになった |
| | 活動へ参加し被災者への感謝 | ・毎月のサロン活動を盛り上げてくれた利用者さんに感謝しきれない |
| | | ・自分たちができたことよりも与えていただいていたものが多く、感謝の気持ちでいっぱいである |
| 被災者の仮設住宅生活の支え | 被災時のことを提供 | ・「当時は話せなかつたけど、今なら思い出として話を語ることができた」と話し、被災当初のことについて語ることができた |
| | 仮設住宅のコミュニティへの貢献 | ・住民同士との交流の場になれたことが大きな成果である |
| | | ・隣に誰かが住んでいるのかさげが分らないといきなり現状のコミュニティ活動が少なくて役に立ってはいないかと振り返る |
| | 仮設住宅生活の楽しさ | ・多組織による定期的なサロン活動も並行者があり楽しんでいるが、ほほ倍の人数の参加者がいる |
| | | ・「苦しい時もあるけれど、カッキー’Sのみみんとの時間が楽しみ」と話し、カッキー’Sの活動は力になる」と感じている |

た「活動を継続できるという強みを生かして伝える誠意」を意識していた。また、「学生が楽しんで活動することで住民の方々にも楽しんでもらうことができると実感した」というように「学生も被災者も楽しむことを意識した活動の企画」をしていた。

(4) 【被災者との関わりから生まれる活動への動機づけ】

7コード, 2サブカテゴリーで構成された。

学生は、「被災しても前向きに日々の生活を送る人たちに、私が逆に元気とやる気もらった」といった「逆に被災者から元気をもらう」こともあった。さらに、「被災者からの『ありがとう』が私達のモチベーションだった」等、「被災者のためになりたいという原動力」が生じていた。

(5) 【学生だからこそできる被災者との関係性】

17コード, 2サブカテゴリーで構成された。

活動をする中で、「学生の方が教えられることが多く、支援される側とする側が曖昧な関係であることが活動を継続する要因だった」と振り返っており、「未熟であるがゆえに支援する側とされる側が曖昧になる関係性」となっていた。また、「被災者からみた“学生”は孫のような存在であり、成長する希望的な存在であると考えられた」といった「被災者にとって成長を楽しめる希望的な存在」であった。

(6) 【活動を継続することで生じた不安や悩み】

7コード, 2サブカテゴリーで構成された。

「仮設住宅から出ていく方々を見ると、年々変化していく状況に応じて自分達がどう活動をしていくべきか悩むことが多かった」といった「活動を継続することに関連した悩み」が生じていた。また、「震災の話にどう答えるのが正解何だろうか」と不安に思った」という「被災者との関わりに関する不安」も生じていた。

3) 学生が認識した活動の成果 (表2)

(1) 【実践を通じた看護職としての成長】

14コード, 2サブカテゴリーで構成された。

「生きることに向き合う機会が私のケアのベースとなっている」といった「被災地支援を通じた看護観の形成」があった。また、「対象者へ伝わる健康教育を熟慮した経験は

生きた学びであった」といった「実践の中から看護の知識や技術の習得」もしていた。

(2) 【被災地及び被災者との絆】

11コード, 3サブカテゴリーで構成された。

学生は「被災から10年が経過したが、これからも被災地に寄り添っていきたい」という「卒業後も被災地に貢献し続けたいという思い」を抱いていた。また、「カッキー'Sの活動をきっかけに山田町や岩手県をより好きになることができた」といった「被災地や岩手県への愛着」も生まれていた。さらに、「自分たちができたことよりも与えていただいたものが多く、感謝の気持ちでいっぱいである」という「活動へ参加してくれた被災者への感謝」もあった。

(3) 【被災者の仮設住宅生活の支え】

8コード, 3サブカテゴリーで構成された。

「『当時は話せなかったけど、今なら思い出として語るができる』と話し、被災当初のことを語ってくれた」という「被災時のことを語れる場の提供」がされた。また、「隣に誰が住んでいるのかさえ分からないという現状からコミュニティができておりカッキー'Sのサロン活動が少しでも役に立てたのではないかと振り返る」といった「仮設住宅のコミュニティづくりへの貢献」をしていた。さらに、「『苦しい時もあるけれど、カッキー'Sのみんなとの時間が楽しみ』と話してくれ、カッキー'Sの活動は微力ながらも楽しみの提供につながっていると感じる」といった「仮設住宅生活の楽しみ」となっていた。

考察

1 継続的ボランティアを実施することの意義

本活動実施前は29.4%であった本学部のボランティア活動の参加率が、実施後平均48.8%と高い状態で推移している。また、毎月の活動と並行して地域診断を行い、クラウドファンディングを活用した運動器具の寄贈をし、保健センタートレーニングルームの利用者数が4倍以上になる等の実績を残した。その他にも、サロンの箇所数の広がりや、キャリア教育の実施、学会発表等の成果を残すことができたのは、学年間で活動を引き継いで支援を継続してきたからだと考える。

次に、この活動を2年半活動してきた学生の

学びについて考察する。学生は毎月継続して活動をしていく中で、被災者という特別な存在から、元々は普通の住民であるという【被災者から住民への認識の転換】をしていた。すなわち、被災者という側面だけではなく、元々は普通の住民であるという本来の姿へと捉えなおすことで、過度な気負いがなくなり、【互いに楽しめる活動を継続する重要性】を感じ【学生だからこそできる被災者との関係性】を構築していったと考えられる。その結果、【被災者の仮設住宅生活の支え】となっていたと思われる。このような【被災者との関わりから生まれる活動への動機づけ】が学生にとってさらなる活動の原動力となったと推察する。これまでの先行研究では、学生が行う効果的な支援として、柏葉・奥寺（2017）が傾聴によるカタルシスの促進や、山田他（2017）がハンドマッサージを通じた寄り添いについて明らかにしている。本活動はこれに加え、何度も被災地に足を運び同じ時間を共有し続けることで、前述した被災者との関係性を構築し、【被災者の仮設住宅生活の支え】となっていたと思われる。服部・前田・立木（2013）は被災した方々に寄り添うというのは特別なことをしなくても同じ時間を共有することと述べており、学生は支援のバトンを学年間で引き継ぎながら約10年このことを体現してきた。

一方で、これらの支援が最初からスムーズにできていたわけではない。仮設住宅での生活を開始した時期から、恒久住宅へ移行していく時期等、被災者の生活が変化する度に【活動を継続することで生じた不安や悩み】を抱いていた。その度に、学生間で話し合いを重ね、【実践の中で育まれる主体性】が身についていったと思われる。箕浦他（2012）は近年の新人看護師や看護学生の課題として、態度面や看護に対する姿勢の未熟さについて指摘しており、同時に経済産業省（2006）が推奨する社会人基礎力（前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の3つの能力）を身につけることの重要性を述べている。本活動で学生たちは、在学中の学会発表、地域診断、運動器具の寄贈等の先進的な取り組みを行いながら、【実践の中で育まれる主体性】の獲得や、【実践を通じた看護職としての成長】を遂げてきた。まさに近年の新人看護師や看護学生が抱える課題を解決する一つのモデル的取り組みではないだろうか。

以上のようにそれぞれの学生が活動を主体的に継続し、かつ、学年間で引き継ぎながら長期的に実施するからこそ、【被災地及び被災者との絆】を成果として認識できたと考える。これらの学びと成果が本活動の意義であると示唆された。

2 本活動の再実現性について

本活動を再現するためには、被災地へ貢献したいという強い思いを持った学生の存在は欠かせない。しかし、再実現性という観点から、今回は教員の働きかけを中心に考察する。

本活動の再実現性を高めるために重要な要素は①活動予算の獲得②学生の学びの促し③被災地と学生のニーズの調整であると考えられる。

曾根・武山・金谷・林・石垣（2017）は、活動資金が得られなければ活動の継続が難しいことについて指摘している。被災地へ出向くための移動費やサロン等を開催するための費用もかかり、活動を継続するためには財源の確保が必要不可欠となる。文部科学省（2021）は、大学にはそれぞれの地域における社会・経済・文化への貢献が期待されていること、さらに、第3期教育振興基本計画において高等教育段階では、学生に幅広い知識と教養、主体的に変化に対応しつつ学んだ知識・技能を実践・応用する力、自ら問題の発見・解決に取り組む力を育成することを示しており（文部科学省、2018）、これを鑑みると、大学は、学生が行う災害時ボランティア活動について、社会貢献・学生の学びの観点から財源を含めた支援体制を整備する役割があると考えられる。教員はこれを理解し、必要性を伝え、活動予算の獲得をする必要がある。

次にこの社会貢献と学生の学びがより充実したものになることが重要である。佐々木（2021）は、学生の本分は学業にあり、学修と災害ボランティアを高いレベルで両立させるための、教員による支援の必要性を述べている。しかし、本活動に参加した学生の学びや成果から、必ずしも災害ボランティアが「本分」と別物と捉える必要はないと考える。すなわち、災害ボランティアも学修の機会と捉え、学生の学びを促すよう指導していくことが重要であると考えられる。富樫（2015）はボランティアには「奉仕」という利他性と実施者側の「学び」という利己性の両側面があると述べている。また、河野他（2018）は、

看護教育課程でも「可能な限り」ボランティア活動を推進することの重要性について述べている。つまり、学生の主体性を尊重しつつ、学会発表や卒業研究の指導等発展的な関わりを行うことで、より学生の学びを深めることが可能になるのではないかと考えた。

最後に、被災地と学生のニーズの調整について考察する。被災地では、災害前のコミュニティを踏襲する地域もあれば、統合や再編をする地域など多様性がある。また、被災者の居住地や支援体制の変化も早いので、学生が考える活動と地域のニーズとのズレを調整することが必要となる。実際に学生より、「仮設住宅から出ていく方々を見ると、年々変化していく状況に応じて自分達がどう活動をしていくべきか悩むことが多かった」等、【活動を継続することで生じた不安や悩み】もみられた。このことから教員は、市町村の政策や被災者の状況、現地の支援システムを知り、かつ、看護学生の特性を知る「被災地保健師」と連携し、活動継続の観点から先を見据えた学生との関わりが重要であると考えた。

以上のように学生を中心とし、大学・教員・被災地保健師がそれぞれの役割を担うことで再実現性が高まると考えられた。

研究の限界と今後の課題

本研究は、活動に参加した学生全体ではなく、各学年から数名と、限定されたデータに基づく分析結果である。また、学生が担った役割や活動項目に沿って整理をしたわけではないため、厳密な意味で全体と相違がある可能性がある。今後は、役割や活動項目による学びの違いを、原稿と併せてインタビュー調査を実施する等、方法について検討する必要がある。

結論

本活動を継続することで、学部のボランティア活動の参加率が高い状態を維持するとともに、運動器具の寄贈、キャリア教育、学会発表等先進的な取り組みへと発展した。災害ボランティアを継続することで【被災者から住民への認識の転換】をし、【学生だからこそできる被災者との関係性】を構築することで【被災者の仮設住宅生活の支え】となっていたこと等、学生の学びや学生自身が認識する成果が明らかとなった。本活動を再実現するためには、①活動

予算の獲得②学生の学びの促し③被災地と学生のニーズの調整が重要な要素であると考えられた。

謝辞

本活動は岩手県立大学より予算交付を受け実施している。

本活動においてお世話になっている住民の皆様、被災地の支援者の皆様、その他、学生の学びのために尽力して下さった皆様に心から感謝いたします。

引用文献

- 服部将茂, 前田志織, 立木真美 (2013): 東日本大震災における学生ボランティア活動報告—防災関連サークルが企画した被災地ボランティアで考えたこと—, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8 (1), 53-58.
- 深澤未来, 畠山陽介, 橋場祐佳, 井上都之, 尾無徹 (2013): 看護学生ボランティア団体「カッキー'S」岩手県山田町における活動報告, 月刊地域保健, 44 (9), 62-69.
- 伊藤和也, 橋場祐佳, 畠山陽介, 尾無徹, 井上都之 (2014): 東日本大震災山田町の仮設住宅及び一般住宅における健康状態と運動習慣と今後の課題, 日本災害看護学会, 16 (1), 202.
- 祝原あゆみ, 渡邊克俊 (2019): 平成30年7月豪雨災害の被災地を訪問した看護学生の学び, 島根県立大学出雲キャンパス紀要, 15, 65-72.
- 岩手県立大学 (2017): 平成28年度「卒業年次生学生生活アンケート」調査結果報告書.
- 岩手県立大学看護学部 (2012): 平成23年度東日本大震災復興支援活動報告書.
- 岩手県立大学看護学部 (2013): 平成24年度東日本大震災復興支援活動報告書.
- 岩手県立大学看護学部 (2014): 平成25年度東日本大震災復興支援活動報告書.
- 柏葉英美, 奥寺三枝子 (2014): 看護基礎教育における災害ボランティアの教育効果, 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 16, 1-9.
- 経済産業省 (2006) 社会人基礎力, <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> [検索日2021年3月1日].
- 河野保子他 (2018): 看護学生のボランティア活動と自己実現との関連, 及び自己実現に影

- 響する要因の検討, 人間環境大学松山看護学部紀要, 1, 36-41.
- 箕浦とき子他 (2012): 看護職としての社会人基礎力の育て方, 日本看護協会出版会, 東京都.
- 中島佳緒里, 大渡佳世, 奥村潤子 (2013): 仮設住宅におけるボランティア活動を通じた看護学生の学び, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8 (1), 41-46.
- 佐々木久美子 (2021): 被災地保健師とともに取り組んだ学生ボランティア活動, 日本看護協会 機関誌, 73 (4), 107-113.
- 曾根志穂, 武山雅志, 金谷雅代, 林静子, 石垣和子 (2017): 東日本大震災被災地における公立看護系大学の学生災害ボランティア活動の実態と課題—今後の学生災害ボランティア活動とその支援の考察—, 石川看護雑誌 *Ishikawa Journal of Nursing*, 14, 127-134.
- 富澤弥生他 (2016): 東日本大震災後の仮設住宅における継続した健康支援ボランティア活動から看護学生が学び感じたこと, 感性福祉研究所年報, 1344-9966 (17), 161-168.
- 山田町 (2015): 平成27年度山田町主な施策の成果.
- 山田町 (2018): 3.11東日本大震災 山田町害被概要について, https://www.town.yamada.iwate.jp/fs/1/6/8/3/4/_/higasinihonndaisinnsai.pdf [検索日2021年8月21日]
- 山田町 (2021): 山田町月別の年齢別人口調べ(令和3年度), <https://www.town.yamada.iwate.jp/docs/3402.html> [検索日2021年8月21日]
- 山田正実他 (2017): 看護学生が行う災害ボランティア活動のための<ハンドマッサージ研修>の効果と課題—学生がコミュニケーションをとりながらハンドマッサージを相互に提供し合う体験からの気づき—, 新潟県立看護大学紀要, 6, 1-8.

Abstract

Yamada Town, Iwate Prefecture, was strongly affected by the Great East Japan Earthquake of 2011. For approximately 10 years, a student volunteer body of the Faculty of Nursing, has implemented support activities for victims of the earthquake, such as salon activities in temporary dwellings and career education for high school students. The aim of this study was to significance of the activity, and rerealization. This was achieved by elucidating the nursing students' learning though the support activities, the achievements of the support activities recognized by the students, and the reproducibility of the support activities.

The support activities were examined, and factors regarding what the nursing students had learned, what the students had felt, and what the students had considered through the support activities were extracted from a report of the support activities and from manuscripts of 17 students in a book published by nursing students. The extracted descriptions were qualitatively analyzed.

By continuing disaster volunteer activities, nursing students could change "victims' recognition from victims to residents" and construct "great relationships with victims." Thus, nursing students could support "victims' lives in temporary dwellings." This study elucidated nursing students' learning though the support activities themselves and the achievements of the support activities recognized by the students. The factors necessary to reproduce the support activities include: (1) Budget acquisition, and (2) Encourage students to learn, and (3) Coordinating the needs of the affected areas and students.

Keyword : Great East Japan Earthquake, Nursing Student, Continuous Volunteer activity